



TITLE:

<大會抄録>南宋の叛將劉整

AUTHOR(S):

衣川, 強

CITATION:

衣川, 強. <大會抄録>南宋の叛將劉整. 東洋史研究 1986, 45(3): 594-595

ISSUE DATE:

1986-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/154156>

RIGHT:

バーブル・パーディシャーフと
ハイダル・ミールザー

開野 英 二

十六世紀の前半、中央アジア出身の二人の王子たち、すなわちバーブル・パーディシャーフとハイダル・ミールザーによって、十四—十六世紀の中央アジア史に關する、二つのすぐれた歴史書が著わされた。チャガタイ・トルコ語によるバーブルの『バーブル・ナーマ』と、ベルシア語によるハイダルの『ターリーヒ・ラシーディ』がそれである。この二つの史書は、例えていえば、中央アジア史學史の虚空に燦然と輝く二つの星である。この兩書より以前にも、また以後にも、中央アジアでは、これらに匹敵する史書は一つとして著わされていない。このように古來すぐれた史書に乏しい中央アジアで、十六世紀の前半、なぜ卓越した史書が、二種類も誕生したのか。

この疑問に答えるために、今回の發表では、(1)まずバーブルとハイダルの血縁關係を示し、(2)ついで兩者の直接的な交渉の跡をあとづけ、(3)さらに二つの史書の構成、敘述様式、共通する事象に關する記述の異同等を比較検討する事によって、(4)結論的には、ハイダルの書がバーブルの書の大きな影響の下に成ったものであると思われる事、しかし兩書が、それぞれの著者がおかれた立場を、見事なほどに誠實に反映した、きわめて獨自性に富んだ貴重な史料である事を明らかにしたい。

南宋の叛將劉整

衣 川 強

一二五八年二月、蒙古の憲宗モンケは南宋征討の命令を降し、自ら四川に進出したが、翌五九年七月、合州釣魚山の軍營で病死した。憲宗自らの出陣による猛攻のため、四川各地の南宋側の軍人・官僚の多數が蒙古に投降した。憲宗の病死によって蒙古軍が北へ撤退して、四川における兩者の抗争は一時より弱まった。

咸淳七年(一二七二)より、元軍は襄陽攻略を強化し、一二七四年に陥落させた。襄陽の陥落後、臨安を指す元軍のほか、四川においても南宋の殘存勢力の掃討が進められ、ふたたび南宋の軍人・官僚の元へ投降するものが増加した。

開慶元年(一二五九)から咸淳九年(一二七三)までの間、四川では宋元の戰鬪が停止することはなかったが、むしろ南宋側の政治や軍事の再建が進められたことを除いては、宋元交代の主要なる舞臺ではなかった。こうした一種の安定の中で、南宋の猛將劉整が、景定二年(一二六一)に蒙古側に投降した。

劉整(一二二—一二七五)は、もともと金の支配地で生まれたが、金朝の滅亡と相前後して南宋に歸服し、孟珙の麾下で勇名をとどろかせた。のちに知瀘州・潼川安撫使になり、この時に元に投降した。南宋側の資料では叛將劉整、あるいは短かく叛整と言われる。

蒙古・元軍の主力部隊と相對峙しているときの南宋側からの投降は、その例をよく見る。實際、南宋末の四川における宋側の官僚や

軍人の投降は、モンケの親征の時期と、襄陽陥落後の時期とに數多く見られる。しかし、劉整のように、右の二つの時期を山とすれば、その間の谷間にあたる時に、突然、蒙古側に投降したのは稀な例と言える。

この劉整の投降は、もっぱら南宋側の内部事情によるものと考えられ、とりわけ時の權力者賈似道と當時の南宋の四川に對する統治とも無關係ではない。こうした問題の一端に觸れてみたい。

唐代兩稅法管見

——戸等制の問題とも關連して——

船越泰次

唐代兩稅法の課税體系は、夏秋苗の作付に對應し見苗田畝上に課される斛斗の徴料と、資産に應じ戸に課される夏秋の兩稅錢賦課の兩種徴料により成ると解される。ところで少なくともこのうち兩稅錢賦課に關しては、從來、これを舊來の九等の戸等により課されたとする見方が一般である。しかしながら當時戸等の實態やその他からみて、こうした理解は成立しがないように思われる。この説の根據は兩稅法諸記事にみえる等第・定戸の語にあると思われるが、これらの語は必ずしも舊來の九等の戸等を意味するとは限らず、定戸の語は概ね戸の兩稅額査定の義として用いられていることに注意したい。そしてこの後の兩稅法の展開や戸等制の變化とも關連し、兩稅錢の賦課問題、兩稅法と戸等の關係について論じてみたいと思う。また穆宗長慶三年（八二三）になされた元額と同州奏均田狀を

とりあげ、税制解釋上の問題點にもふれてみたい。
發表では以上の點を中心に、唐代兩稅法に關し私見を述べることにしたい。

後漢末の政治思想と政治動向

狩野直禎

後漢末期、靈帝以後の政治思想を現實の政治との關連において考えてみたい。

崔寔（政論）、應劭（風俗通義）、荀悅（申鑒）、徐幹（中論）、仲長統（昌言）等の名前が、先ずこの期を代表する學者・思想家として擧げられてくるであろう。當然これらの人物を抜きにして、この期の政治思想・政治の方向づけを論じ得ないが、後漢書及び三國志の列傳中に引用されている、上書・對策などを取り出して、考察の材料としたい。

前者のグループの中、荀悅（一四八—二〇九）は、申鑒卷二「時事」の卷首に、

最凡有二十一首其初二首尙知貴敦及其二首有申重可舉者十有九事

と述べ、「明考試」以下の十九事を列舉する。

後者の中に例えば盧植（？—一九二）がいる。劉備・公孫瓚は彼に師事したのであるが、彼は光和元年（一七八）、日食の際に、

消禦災凶宜有其道謹略陳八事